

インタビュー 木村靖二氏に聞く

とき 1990年12月11日

ところ 東京大学本郷木村研究室

企画・採録・聞き手 橋場 弦

(冒頭、木村氏が小学校時代、北海道小樽に住んでおられたことから、スキーの話などで雑談。)…………

橋場:僕の住んでいた近所にもスキー場があったんですけど、昔はリフトになんか乗らないで、自力で登っていましたね。20分かけて上まで登って、30秒で滑り降りる…。

木村:そうそう。あれがむしろ、本当の運動になっていたんだよね。滑るだけじゃあね。

橋場:今思えば、あれで人生を学びましたね。30秒の快楽を得るためには、20分苦しまなければならぬという。

木村:(笑い) そういうことです。

1.「元来は古代史志望で…」

橋場:最初に先生にお目にかかったのは、(本郷に非常勤で来ておられた)1983年の夏でしたか、僕は留年中の一介の学部生で、柴田先生、福井先生、それに木村先生、お三方と僕達がコンパに行ったときでした。あのとき僕はそのお三方に、コテンバンに攻撃されて、まるで蚤を殺すのに鉄槌を振るうかのごとく…………。

木村:あ、そうだった?(笑い) 僕はもう、最近忘れっぽくなっているから…(笑い)。

橋場:東大に来られて2年目ということになりますが、最近の学生など見ていてどうでしょう?

木村:そうねえ…。80年代からそんなに変わっていないんじゃないかな。非常勤を(1982・83年に)やったときは、ちょっと驚きましたけどね。つまり、試験の答案の書き方なんか、みんな同じような内容になっていて、個性的なものに乏しいというか。そういう意味で(当時は)少しがっかりはしましたね。最近は慣れてきたのかあまり気にならなくなりましたが。

橋場:他には何か…。

木村:うーん、そうねえ。まあ21世紀も目前ですからね、80年代とは少し違ったタイプというか、新しい考え方の学生が出て来て欲しいところなんだけど。まあ、別にそう年代を気にしているわけではないです。社会状況というか、全体の状況がね、前と違ってきたことが(学生の雰囲気にも)良い意味で影響を与えて欲しいですね。

橋場:先生ご自身が卒論を書かれたのはいつ頃でしょうか。

木村:僕は、入学が1960年で卒論を書いたのは1964年になります。学年から言うと、樺山(絃一)氏と一緒にの学年でね。なんかえらくニギヤカナ学年で(笑い)・・・大学院に進学した率も割合と高かった。我々はいつも研究室を占領して、たぶん上の学年の人達から見れば、ワイワイガヤガヤと、ヤカマシイ学年に見えたんじゃないかな(笑い)。

橋場:学年(の個性)にも、年によって波があるんでしょうね。

木村:誰というのでもなく、ワイワイガヤガヤ集まる学年と、それから、ばらばらに一人一人勉強しているという学年とね。確かにそういう意味での波があると思いますね。

橋場:それじゃあ、その卒論を書いておられた頃の話と、当時の社会状況なども含めて、していただけますか。「卒論の頃」ということで……。

木村:そうですね。僕は最初から大学院に行こうとは思っていたんです。ただまあ、当時は(大学への)就職という考えは全然現実性をもっていませんでしたね。僕達の頃の助手は、最初は直居(淳)という方で、その次が西川(正雄)さんと、伊藤(貞夫)さんでした。その(お二方の)ころから、割合と、助手の人達と話をするという機会が少しずつできたんですが、その頃は助手の方は、偉く見えましたよ。あそこに座っておられる方々というのは、もう完全に先生でしたね。つまり、ああいう偉い人達がまだ助手なんだから、就職の望みなんか夢みたいな話に聞こえました。だから大学院に行ったらまず10年は職がないと思っていましたから……。僕は少し進学の意志がぐらついて、4年の秋なんかには、就職試験など受けたことがあるんです。さすがにそれは少し見苦しいというので、止めましたけど。

橋場:64年という、60年安保の時代は既に終わっていて、68年には更にまだ4年あるという……。

木村:谷間の時代ですね。だから60年安保は高校の時でした。高校では生徒会で、僕もまあ、ちょっと(活動を)やって、なんか睨まれたことがあった(笑い)……。

橋場:高校はどちらなんですか?

木村:僕はね、伊豆の下田なんです。それも、もともと函館の高校に入っていたのが、親父が引っ越したんで途中から入ったんです。小さい高校ですよ。最初のうちは、みんなで意見を言い合う会を開こうという程度で……。もちろん生徒会はあったんだけど、もともとそんなことを考えもしない御用組合みたいな存在でした……。

橋場:御用組合……

木村:それで臨時の生徒会を開けと言ったら、学校側はいい顔しないんで、こちらはいよいよ「けしからん」ということになって、反安保というより教師批判の方に重点が移りました。それで、ちょちょっとやったけど、まあそれも、夏休み挟んですこしやった程度です。就職する人も多かったしね。こちらも進学で忙しくなって終わりです。ですから大学には「祭りのあと」に入ったような具合でした(笑い)。

60年安保といってもね、学生と教員とが連帯していた面があったから、大学内のあり方はそう前と変わっていたわけではないと思います。ですから、谷間の世代といって、何やら思い入れよろしく悲しい顔をして見たところで、実際の大学の雰囲気としては非常に良かったです。ある意味では、68年後から振り返ると、ほんとに牧歌的なものでした。みんな研究室にたむろして、学科旅行なんかにはほとんど全員行きましたね。学科旅行の写真と卒業式の写真以外には見たことがない奴がいる位です(笑い)。

それから、これは大学院に入ってからだと思うんだけど、西川さんのご努力で、アメリカからハルガルテンとう学者が来て、集中的にゼミをやりました。そろそろ外国の学者を呼んで交流するという新しい状況になって、それに大学院生が協力するという、なんかこう、麗しい時代でしたね(笑い)。

橋場:学問的には、そうすると、理想的な時代でしたね。

木村:そう、そういう意味では幸せな時代だったね。それから特に、ドイツ現代史に限って言えば、ドイツの一次史料がマイクロフィルムで使えるようになったのは、我々の世代からでした。

橋場:ドイツ史を志そうとしたきっかけのようなものは……?

木村:それはよく聞かれるんだけど、大変申し訳ないんだけどはっきりしない。僕の場合はもともと、丸山真男さんの『現代政治の思想と行動』などに感銘を受けたということがあります。

ただ僕は元来古代史志望だったんですよ(笑い)。だから駒場のときには、ちゃんとラテン語・ギリシャ語もとって、一応単位は取りましたね。僕は村川(堅太郎)先生のゼミには2年間ちゃんとでていました。

ただ、(ドイツ史に)かわったのも、あまり動機は純粹じゃないんですよ。これは亡くなってしまったんですけど、同級に桑原(洋)君、浅野(勝正)君というのがいましてね、ギリシャ語が非常にできる、会話もできるという噂がありまして、こんなのと競合したんじゃないかなわない、というので(笑い)。それで、現代の政治というものにも引かれていたこともあって、そちらのほうも面白そうだということで、現代史にしたんですね。

だから、僕は、あのギリシャ語の大きな辞書があるでしょう……

橋場:Liddell&Scottですね。

木村:あれをちゃんと持っていたんですけど、それを、泣く泣くですね、樺山君に売り渡したんですよ(大笑い)。あれはわざわざ丸善にまで行って買ってね、それを本箱にデンと置いていたのだけど、樺山氏がね、「お前はもうギリシャ史をやらないんだから、それを俺にくれ。」というのでね。

橋場:では、直接にはドイツ現代史をやるとすれば、当時はどの先生がいらしたのですか。

木村:直接にはもちろん林健太郎先生がいらしたし、また、当時既に村瀬興雄先生が中心と

なっていた現代史研究会というのが機能してまして、それが我々後輩をちゃんとリクルートしてくれました。たしか3年になってからすぐに、本郷の学士会館の現代史研究会の集まりに入りましたね。大変勉強になりました。

2.「卒論の思い出」

橋場:卒論のテーマはどのようなものでしたか。

木村:卒論は一種の思想史でした。ヴァイマル共和国の余り知られていない、メラール・ファン・デン・ブルックという人物です。保守革命論者の一人ですが、今では、ヴァイマル文化のなかでは、保守革命論とか、革命的保守主義とかは、好んで取り上げられるテーマですが、もともと思想としてはそんなたいしたものじゃないんですよ。ただまあ、当時の、伝統的な政治規範が無くなった状態を、非常にシンボリックに示しているの、興味をもったわけです。「第三帝国」という論文集を書いていて、一種の文化人ですね。いかにも、初心者が飛び付きそうなテーマで、案の定、卒論としては失敗作でした(笑い)。

橋場:当時の社会一般の状況で特に記憶に残っていることなんかないですか。

木村:そうねえ、特に景気がいいわけじゃなかったし、やっぱり当時の学生生活は今と比べりゃ大違いで、娯楽といったって映画くらいのものでしたね。まあ時々映画見て、あとは大学で本を読んでいるか、人としゃべっているか……単純といえば単純な時代だったですね。

(ここで何人かの学部生が訪ねて来て、対談は一時中断。先週は、学部の講義が学生ストライキで休講だということを知らずに講義を行ってしまい、)

木村:しかも先週(木村氏の講義に学生が)ちゃんと何人か出てたっていうのはけしからんじゃないの!(一同爆笑)。驚いたよ。ちょっと今日は少ないなとは思ってたけどね。

(学部生たち去る。)

木村:……基本的にはやっぱり(当時は)大学中心の生活でね。話をするとっても勉強の話でね、ヘーゲルがどう言っているとか。僕は、(雑誌)『世界』と、70年代に廃刊になってしまった『展望』は取っていましたね。

橋場:ご自身の政治思想としては、どのようなことを考えておられましたか。

木村:漠然とですが、その頃では、当然というか、社会主義ですね。そういう革命みたいなものが必要である、というのは、もう自明のことだと考えていました。友人のなかには、資本主義がいいんだという人もいましたけど、そういう人はなんかこう、偽悪的な姿勢が強いように僕は見ていました。つまり、資本主義というのは、アメリカを別とすれ

ば、日本では守れるほどの豊かさを持っていなかったから。だからむしろ、社会主義で貧富の差を縮めるというほうがいいんじゃないかと。

橋場:卒論を書いていたときのことで思い出に残ることはありませんか。

木村:これは同級生は覚えていることなんだけども、僕は結局完成品を書けなかったんですね。(卒論提出直前の)3日間は寝なかったですね。それでもどうしても書けなくて、(締め切り)当日になってふらふらと一しかも原稿を製本もしていないままーその原稿の束をかかえて本郷三丁目から、意識朦朧となって、研究室に電話してですね、「僕はもう出すのを止めました。」と言ったら、助手の人達が「なんでもいいからこちらに来なさい。」というんで、僕はふらふらと行ったら、みんながワーツと寄ってたかって、あつというまに製本しちゃったんです(笑い)。

橋場:それは研究室の雰囲気としては暖かいですよ。

木村:そう、みんなで寄ってたかって出してくれたわけだからね。ほんとにあれがなかったら、どうなっていたかと思えますよ。僕は経歴上はすいすいと来たように見えるかもしれないし、人にもそう言われますが、実はその都度いろいろお世話になった人達がいるわけです。そのとき向う側に落ちていたらどうなっていたらろうと考えることがありますよ。だから救いの親みたいなのが周りにぞろぞろいるんです。……僕自身は事務室にも(卒論を)直接もって行かなかったように思いますね。ぼーっと研究室の椅子に座ってですね、意識朦朧となっているのに、誰かが「出して来たぞー」なんてね(笑い)。

橋場:西洋史の研究室は、なんとなく居る分には、非常に居心地のいい雰囲気というのが今でもあるような気がしますね。かえてそれが怖いような感じもしますが。

木村:そう、そこに浸りきっちゃうというのは、良くない。

橋場:ほんとになんとか居心地はいいんですね。派閥に別れているわけでもなし……。

木村:まあ、当時はもちろんいろいろ学生運動の政治的な対立もあったんですけど、すくなくともそれを持ち出すということはなかったですね。その意味では付き合い方が大人だということは感じましたね。

3.『両方からの視点』

橋場:卒論を書いたからは、どのように研究の問題意識は変わって来たのでしょうか。

木村:当時は教養の国際関係論の人も加わっていたコミンテルンの研究会にも入りました。それは後の『社会運動史』につながる人脈です。北原(敦)さんとか加藤晴康さんとかね。それと同時に、僕は以前から両方からせめて行くという発想があって、つまり、革命側からだけじゃなくて、保守派の側からもみていこうということです。ですから保守主義に関心を持ったのも、保守主義それ自体に関心を持ったというより、当時のドイツ

の政治像全体をつかむためには両方の側から見て行こうという、今でいう研究戦略をおぼろげな形でもっていたわけです。片っ方だけから見たくないという。

修士論文のときには、今度は保守派の政治運動のほうを取り上げました。これは西洋史学科に当時ポツダム中央文書館のマイクロフィルム史料が入って、それを活用したいという思いも強かったこともあります。これを使ったのは僕が世界で2番目くらいですよ。非常に珍しい史料でしたからね。それを扱えるという喜びと、それから保守派と革命派というテーマを求めようということです。留学したときは、その二つを同時平行的にやりました。

橋場:留学なさったのは何年?

木村:1968年です。

橋場:そうすると……

木村:だから、運動(大学紛争)が始まったときに、失礼します、ということになっちゃってね(笑い)。あとあと大いにたたりました。

僕は修士論文出して翌年助手になっちゃったわけだね。それは、当時新制大学が地方にどんどん出来て、それまで、上にいた諸先輩があっという間に就職していなくなってしまった時期です。助手になったときには最年少の助手と言われちゃってね。実際僕も驚きました。

橋場:では助手であった期間というのは……

木村:実質半年ですよ。そのあとすぐ留学した。ただ休職手当というのがついてこれはドイツで随分助かりました。

……(ヴァイマル共和国というのは)当時の評価からいえばやはりブルジョア民主主義国家ですから、共和国自体への関心というより、なぜドイツ革命がうまく行かなかったのか、という問題意識が強かった。それからドイツ共産党というのは、ソ連を除けば最も大きな共産党ですから、あの段階での革命組織、それからコミンテルンとの関係なんかを知るには一番いい手掛かりなんです。

(ドイツ留学は)1年8カ月ぐらいでしたが、もうしばらくいようと思っていたんです。そしたらミュンヘンの僕の先生が(他の大学に)動いてしまっ。お前も一緒に来るか、と言われてだいぶ悩みましたが、そのときに、日本から「就職があるので帰って来い」という連絡が来ました。僕は正直のところ余り気が進まなかったんですが、結局帰って来て、茨城大学の講師になりました。

橋場:それはまだ20代……。

木村:そう、27でした。茨城大学では初めのころ何度も学生に間違えられてね(笑い)。非常に困りましたよ。

(留学中に大学紛争があっ)て帰国したとき柴田さんにすこしイヤミを言われたんです。研究室に帰国の挨拶に行ったときにね、「今日初めて研究室が開いた。(それまで

は封鎖されていた。)君はもう、およそ悪運の強い男だ」ってね(笑い)。僕はそのときなんと申し上げていいかわからずに、「ははあ」なんていうほかなかったですが。

その時になると、従来持っていた考えではだめだっていうことに気が付きました。それから、もう一つ帰国して困惑したのは大学紛争で両派の対立が非常に激しくて、以前の研究室の雰囲気が無くなっていました。交友関係も大変動をきたしました。しかし、僕はコミンテルン研究会の関係から徐々に全共闘系の人達の研究会に入れてもらうようになって、だんだんそちらのほうでやって行くようになりました。革命と反革命とかを、政治党派の次元で見たのではわからないんじゃないか、と思い始め、それで社会運動史のほうに行ったものですから、共産党の研究はもうやる気がなくなってしまいました。

72、73年頃でしたか、当時社研が(ファシズム関係の)研究会を開いていたんです。それに誘われて、結局相変わらず研究は二本だてになっていました。つまり、社研の研究会のほうでは、保守派とファシズムとの関係の研究を期待されたわけで、それから、社会運動史のほうとね。僕はよくそうやって併行してやられてるな、と言われてきましたけど、両方とも勉強になりましたね。社研の政治学関係の人達と話し合っ、て、学ぶところが大きかったですね。ただ、なんといっても一番刺激を受けたのは社会運動史の研究会でしたね。

…近藤(和彦)氏はね、68年の進学ですね。僕はよく覚えています、それ。山上会議所での歓迎コンパのときにね、マックス・ウェーバーについてえんえんとしゃべる、えらく小生意気で威勢の良いのがいた、それが近藤君でしたよ(笑い)。まあ、小生意気なんて言ったら申し訳無いですが、非常に印象が強くて、折原(浩)さんの申し子みたいな(笑い)奴が来たというんで、驚いた記憶はあります。

マックス・ウェーバーについては、僕も常識的な本は読んでいましたけど、一方ではそうとう疑問もあった訳でね。アメリカ経由で入って来たということももちろんあるんですが、マルクスとウェーバーが、そう簡単に結び付くのかどうかね。またそういったことが本当に役に立つのかどうかということについては、やや疑問に思っていた。それから日本におけるばあい、やはりウェーバーの受容のしかたというのかな、そもそも誰がどういう紹介をしていたのかということとも関係しますが、そういうことに対する不信感みたいなものも漠然とありましたね。それを取り払ってくれたのが、やっぱり折原さんですね。これはすごいという印象をもちましたね。

橋場:話がちょっとそれましたけど、では、そのころから今に至るまで、というお話しを…。

木村:そうね、あとはまあ、75年に立教に移りましたから、それからはだいたい基本的には方向は変わらなくて。ただ、社会運動と政治的な構造みたいなものを結び付けるという

ことをやりたい、というのは続いています。それがこんど、ドイツ革命という、第1次大戦によって19世紀的な社会・政治が全部転換して新しい時代に移行するという問題についてそろそろやってみようかという、そうことになってきたんですね。だからそういう意味では、以前抱えていた両側からせめて統合するという、そういう基本的な見方というのはそう簡単には抜けていかない。

4.「自分を客観化できる能力」

橋場:ここですこし話題を変えたいのですが、いまはどこの研究分野でも細かく研究が細分化されて、それぞれの研究者が自分にしか分からない言葉でしゃべっているという、そういう事態がありますね。これは、一概に良いとか悪いとか言えないことで、一面では学問の進歩と言えるかも知れませんが、多面、各々が個別化した問題意識しか頭がないという…。それでは歴史学全体として何を目指すのだ、ということにもなりますね。これをどうおもわれますか。

木村:その傾向というのは、実は我々がドイツ現代史を始めたころにまず言われたことです。マイクロリーダーをガラガラまわして、それをコピーにとって、なんかもったい付けて、あーだうーだといっているという、あれがすべての悪の根源であると、昔から言われているんですね。そういう意味では、我々はちょっと忸怩たるものがあるんです。ただ、一次史料を検討するのは必要な手続きですからね。だから、ある意味では、本来やるべきこと、それまで諸般の事情でできなかったものが、ようやくできるようになった。だからそれ自体としては、それをだめだと言ってはならないのであって、もうやるしかない、ということはもちろんありますね。

それから若いときは、誰もやっていない領域をやるとか、新しい語学を使って研究するとか、そういう未知の領域に進むという楽しみがないとやはり今一つ力にならないということは判りますね。たとえば、オランダ語でやってみますとか、チェコ語でやってみるとか。そうすると多少「よしてきた」という意欲もわきますから。

ただそれをやりつつ、(大切なのは)自分を客観化できるという能力も欠かせない。つまり、自分のテーマに対する情熱とか自負とか、それはもちろん必要です。しかし同時に、それをやっている自分をもう一方で冷めた目で見るというのかな、そしてまたその結果がどこにつながるのかということについて、一方で見ておく、ということですよ。どうしても(自分の研究に)4年も5年も溺れて行くと、研究史とか知識の量はいよいよ凄くなって、周りも「これはたいしたもんだ」ということにはなるわけだけど、それを突っばねてみる姿勢、というのかな。

それから僕は、5年10年先の自分の研究がどうなっているのかということをおる程度考えないと、少し怖いと思いますね。若い人ならば、30になった自分、40になった

自分、50になった自分、というね。一種の心構えとして、こういうことはやるんだということを描いて現在を見る、というのかな。今はやりの言葉で言えば、複眼的思考というんですかね。熱を上げて没入して行く自分と、一方ではそういう自分を「ハハアン、だいぶ熱が上がって来ましたね。」と見て見ている自分とね。僕自身はそういう癖が強い方です。だから『兵士の革命』を書いたときに、柴田さんから「なんか今一つ熱がないなあ。」と言われました(笑い)。ま、この点は多少性格的なものもあるでしょうが。

まあ、熱がなかったらこまりますが、熱を上げている自分をみる視点というのがあれば、タコツポ的になるということはないんじゃないかな。

それから、これはつまらないな、ということをよく言う人がいますが、何故つまらないのかを追及する姿勢というのも大事ですね。こういうテーマがつまらない、と言われるときに、そのつまらなさを説明できるというかな。そういう姿勢がなければ、関心はどんどん狭くなりますよね。つまらないといって読まないとか、まったく手を付けないとか、人の話を聞かない、というんじゃないかな。どのみちいい年になれば、好奇心なんて失われるものだから、せめて20代30代には、もうちょっと頑張ってもらわないといけない。ドイツに行って感心したことの一つは、向こうの学者が、年を取りながらも頑張ることね(笑い)。ああいう一種のプロ意識というのは、感心しますね。そのためにはやはり、長期的にやれることは何か、どこまで関心を持続、発展させられるかということですね。あまり狭いテーマでは長続きしないからね。

5.『人間に対する関心』

橋場:よくわかりました。今のことと関係あるのかも知れませんが、何故人は歴史を学ぶのでしょうか。

木村:やっぱり人間に対する関心ではないでしょうか。逆に言えばね、人間に対する関心がなくなった社会というのは、歴史に対する関心もなくなると思う。だから、例えば海外旅行に行っても、人を見て来ないというのがいますね。パルテノンを見て来ました、とか、エッフェル塔に行った、とかいう、あの手合ですね。アテネの人はどうでした、とか、フランスの人はどうでした、ということは言わなくて。建物自体はいくら歴史的なものでも死んでますからね。だから、基本的には人間に対する関心があれば、当然歴史への関心も出て来るのではないのでしょうか。

橋場:今の問いと一部重なるのですが、歴史学という学問は、では、何のために必要とされるのか。あるいは、全く必要ではないのに、国家が大学という機関に歴史学という講座を置いたがゆえに存在しているのにすぎないのか。という問題ですが…。

木村:非常に大きな質問でね、ある意味ではどのようにも答えられるし。おそらく一つ一つ

取ってみれば、政治的な意図もあるでしょうし、もちろん、現代のアイデンティティーをどこかに全体として求めるということがあるでしょう。まあ、非常に陳腐な言い方をすれば、やっぱり基本的にはね、現在を説明したいというかなあ。……全部仮説なんだけども、現在に至るまでの過程を説明できる何かが欲しいという願望はありますね。そして一方では、僕自身は、その説明は仮説に過ぎないであろうという確信もまたもっていますけどね。

橋場:かつては、史的唯物論など、そのような説明のパターンがあったのでしょうか、今はどうでしょうか。

木村:そのようなグランド・セオリーが成り立たなくなったのは、ひとつには、かつてのグランド・セオリーというのは、構造なんです。全体としての構造で説明してゆく。ですから、その限りでは納得するけれども、一方で、だからどうしたんだ、と言われればそこで終わってしまう。(それに対し)今の社会史なんかの関心は、基本的には人に対する関心です。もちろんいろいろ構造なんかはでてくるけど、それで人を説明するのではなくて、人で構造を説明するというかな。全体としての構造ももちろん問題にしますが、人と人とのつながりとか、人の無意識の意識、行動のありかたとか。……その点で、気が付くのは、日本は個人研究とか伝記とかは非常に不得意とする所ですね。

橋場:構造の説明は得意だけど……。

木村:そう。だから、史的唯物論でもそうですけど、あれは構造の学問ですからね。それが今は人(の学問)に変わって来ている……。社会史なんかやって、国家社会はどうするんだ、という疑問や批判が出されていますが、それ自体としては構造優位の立場からするともっともな質問だと思うんですよ。もともと構造を説明したかったわけですから。構造がどのようにして成り立って来るか、だから今はこうなっています、という。今はそうじゃなくて、自分自身がどうなってるか、ということね。そうすると、構造でもっていくら説明しても、少なくとも納得しないと思う。例えば、自分と自然とか、自分が自然を見る視線とか、あるいは人と人との付き合い方とかは、いくら構造で説明しようとしてもできるものではない。そういう意味ではこれまでの歴史学は、人間が住む構造は説明しても、人間そのものは説明しなかった。ある意味では、歴史学は「公」の構造・制度のみを重視して来て、「私」にあたる個々の人間の生き方は説明しなかった。最近ようやくそこんところを考えてみよう、というね。

橋場:最後に、今の学生諸君にメッセージなどありましたら……。

木村:僕は少し相対主義的に考える癖があるものだから、今の世代には今の良さがあると思うし、そういう期待は一方では持っているます。これから(大学院に)進学する人には、対話ができる能力というのが必要ですね。つまり、相手の研究もまず知らなくてはいけないし、自分の言いたいこともある程度そこに持ち出してみなくてはいけないわけ

で。モノログみたいになったり、どうせわかりっこない、とかいうのでは困るんでね。
ディアログができる、ということね。

橋場:それは、さきほどのタコツボ云々の話ともかかわってきますね。

木村:ええ。対話ができなければ、タコツボにすらならないんじゃないかな。(ディアログというものは)もちろん、いつもニコニコと人と話しているというんじゃないで、それを僕は歴史学という言葉で話さなくてはならないわけね。付き合いのいい人になれという(意味)じゃなくてね(笑い)。もちろん付き合いの悪いよりは良いほうがいいけれど。ここで言っているのは、学問・研究を通じてきちんと対話ができる能力のことだね。言いっぱなしで、「これはこうなんだ」と言うのではなくて。

もう一つ言えば、概説を考える能力が求められるでしょうね。

橋場:概説を考える能力?

木村:つまり、細かい研究ばかりしていると、何か大きな枠で書いて下さい、と言われたときに、既存の枠というか、従来の見方を持って来てしまうことが意外と多いのね。自分が19世紀を書いてみなさいとか、18世紀を書いてみなさいとか、言われたときに、どういう書き方をするのか。専門家というのは基本的に言えば、省略できる能力を持っている人ですからね。例えば、極端に言えば、ヴァイマル共和国を10枚で書いて下さい、と言われて書けないというんではこまる。最低限こことここを言えば、ヴァイマル共和国をとらえることができるし、その説明を説得力をもってできる、という判断が要るわけでしょう。素人になればなるほど、概説は長くなりますよ。そういうことを意識できる人間ということです。自分がやっている細かな研究が、自分が書いた概説によって否定されるんじゃ何もならない。

橋場:わかりました。……しかし、最近の院生には、基本的な躰のできていない人が多いよ
うな気がしますね。こんなことを言うのは、私も年をとったのかな。

木村:僕は、基本的にはそういう人が社会史なんかやっても信用しないね。

橋場:(笑い)

木村:いや実際そうですよ。社会史とはMitgefühlが大切ですから。Mitleidを持つ必要はないけれども、ある意味では人と共感するというのを一つの手掛かりにするでしょう。他人に対する思いやりが欠如してはね。そういう基本的なマナーというかね、人と人との関係とか……(そういうことを弁えないのは)戴けませんねえ。

橋場:どうもありがとうございました。

(きむら せいじ・東京大学文学部助教授・ドイツ現代史)